

IPGAストーリー

国際パークゴルフ協会設立10周年記念事業実行委員会(C)1997.8

プロローグ

最初の穴掘り 振興会議 幕別町協会の設立 用具づくり サーモンコース

第1章 国際パークゴルフ協会の誕生

国際大会の計画が先行 設立総会の時期決まる 規約と初代役員決まる

第2章 第1回国際大会

準備委員会が活躍 実行委員会で要綱確定 知事杯を申請 開会式に不安と興奮
初代チャンピオン決まる 交流会は親善の絆 第1回大会の記録

第3章 普及活動

全道にパンフ送る プロモーションビデオを制作 全国レクリエーション大会に参加
マスコミへのアプローチ

第4章 組織づくりの歴史

理事会と協会運営組織 常任理事会は平成4年度から 運営を支える支部組織
公認指導員・アドバイザー ルール・規約・基準 法人化への道

エピローグ

プロローグ



国際パークゴルフ協会設立10周年記念誌
1997年8月発行

国際パークゴルフ協会が設立されて今年は10周年に当たる。パークゴルフが多くの愛好者や、このスポーツを支援してくれる人たちによって、これからも長い歴史を創っていくことを考えると、わずか10年の時を刻んだにすぎない国際パークゴルフ協会ではあるが、急速に普及を続けるパークゴルフとともに歩んだ足跡を記録に止めることは極めて意義深いことである。

第1章以下に、国際パークゴルフ協会の10年の歩みを記すことになるが、その前に、パークゴルフが幕別町で誕生し、国際パークゴルフ協会が設立されるまでの4年間を、先ず振り返らなければならない。

最初の穴掘り

1996年（平成8年）、幕別町開基100年を記念して発行された「幕別町百年史」第3編「教育・社会」にパークゴルフの記述がある。そこにはパークゴルフ発祥の経緯が、かいつまんで次のように記されている。

『昭和58年5月、教育委員会教育部長に任命された前原懿は、社会体育の分野におけるコミュニティスポーツの取り組みが課題であるとの認識から、社会教育課に「なにか面白いスポーツはないか」と呼びかけたところ、橋本正司（当時、社会体育係長）と羽磨知成（当時、体育担当主査）が日本レクリエーション協会を通じて購入していた「グラウンドゴルフ」用具一式を前原懿に見せたのが事の始まりである。

グラウンドゴルフは、昭和57年に鳥取県泊村の教育委員会が中心になって考案されたニュースポーツ。早速、町営野球場で試してみたが、印象は芳しくなかった。前原は、これをグラウンドから芝生へと、ゴルフに近づけ爽快感を加えようと考えた。結果は幕別運動公園にエンピ管による7ホールの固定コースの誕生となった。58年6月半ばのことである。

公園に穴を掘ってコースを造るなど、当時としては乱暴な発想であったが、相談を受けた公園管理担当の三井巖（当時、都市計画課管理係長）はこれに共鳴

し、上司に相談することを忘れ、穴掘りを手伝ってしまったことも今日の普及発展につながった。』

この記述のなかで三井は上司に相談するのを忘れたことになっているが、それは多分三井の立場も考えての修飾で、前原と三井は以前総務課で課長と職員係長という間柄だったこと、しかも遊び心十分の二人であれば、多分正当で時間のかかる役所の手続きは念頭になく、あうんの呼吸で事が運ばれたに違いない。

後日前原は、グラウンドゴルフが自分のイメージに合わないことに失望し、野球場から帰る途中で目に入った運動公園（発祥のつつじコース）が、突然ゴルフ場に見えたという。つまり、ひらめきであろう。三井にしても、予算をやり繰りしながら造り上げた公園が閑散としていることに物足りなさを感じていた矢先、穴を掘って遊ぶ話が飛び込み、思わずワクワクしてしまったのではないかと思われる。

こどものころを思い出してみると、遊びは創造であり、冒険であった。遊んではいけない場所に入り込む時の緊張感はだれでも覚えている。パークゴルフが生まれたきっかけは、まさに、こどものころの遊びの創造と同次元であったことが理解出来る。

振興会議

1983年（昭和58年）に生まれたパークゴルフは、まだまだ原型という段階で名前も用具もグラウンドゴルフの借り物であった。しかし、翌1984年には14ホールを造成した。といっても当然手づくりであったが、愛好者も増え、この年に「グラウンドゴルフ同好会」（会長・小野寺博昭、現国際パークゴルフ協会副会長）が誕生し、11月5日に初めての全町大会が開催されたが、当日の様様を十勝毎日新聞）は、次のように報じている。



『大会には男女45人の選手が参加。28ストロークプレーで優勝を争った。ホールインワンが飛び出すなど初めての大会としては高レベル。結局旭町の三井巖さん（39）、君子さん（39）夫妻が男女両クラスでアベック優勝を飾った。……』

1985年に入り前原部長は、このスポーツをオリジナ

優勝の三井選手を囲んで
左・小野寺会長、右・前原

ルなものにしたいと考え、庁舎内に横断的な任意組織「グラウンドゴルフ振興会議」をつくった。会議は4月25日に開かれ、次のメンバーで組織された。

座長は、自選で前原部長がなった。副座長に加藤光人（当時、都市計画課管理係長。三井の後任）、座員には、教育委員会から西尾治・田村修一、都市計画課から小野成義・瀨瀬良征・高橋政雄・森広幸、学識経験として三井巖・沢田治夫・橋本正司、事務局長に小尾和夫（当時、社会教育課長。故人）、同次長に斉藤久三男（当時、社会体育係長）、次長補佐に林隆則（当時、社会体育係）・元村昭胤（当時、社会教育課派遣社会体育主事・故人）の15名である。

振興会議の仕事は、コース設計及び設置工事、標準打数の決定、ハンデ委員会の構成、その他の口出しとなっている。

当日協議された事項は、14ホールを本格的に18ホールのコースに造成することであった。造成といっても、芝生は新たに植える必要もなく起伏も樹木もあり、コースレイアウトとカップを埋める作業が主な仕事である。作業は4月30日の午後と決めコースオープンを5月3日に決めた。

コースに埋めるカップにはエピソードがある。最初に埋めたエンピ管は直径約20センチの輪切りであったが、翌年には三井の提案で本物を作ることになり、自らゴルフ場におもむきゴルフのカップの構造を調べてきた。これをもとに町の小野鉄工場に依頼して直径約20センチのカップが完成した。このカップは今でもモデルチェンジすることなく使われ、カランというカップインの音が心地よくコースに響き、パークゴルフのイメージをより素晴らしいものにしている。

予定どおり4月30日午後、前原の原案を基にコース造りが行われた。現在のつつじAコース9ホール382mパー33、Bコース9ホール341mパー33の18ホールである。前原は最初16ホールをレイアウトしていたが、せっかく造るのだから18ホールにしたいという現地でのみんなの意見により2ホール増やすことになった。それが現在のAの7番ショートホールとBの4番ショートホールである。

その日作業が終わり、さてコース名はどうするということになった。この公園は樹木は白樺、花はつつじが目立つ存在であったが、結局つつじの季節というこ

ともあってか「つつじコース」で落ちついた。

1986年（昭和61年）3月、振興会議はグラウンドゴルフをパークゴルフと名称を変えた。公園の芝生にコースを造るという発想が、幕別町生まれのオリジナルスポーツとして育ってきた。新しい名前を考えるのは当然との声が高まり、あれこれ名称の候補が上がったが、結局「公園」を使うスポーツというイメージで「パークゴルフ」という名称になった。

振興会議も、当然のこと「パークゴルフ振興会議」と変わり、この後メンバーの一部交代などをしながら活動を続けたが、平成に入り大きな使命を達成したという認識に至り組織を解散した。

幕別町協会の設立

1986年9月8日に「幕別町パークゴルフ協会設立総会」が開催された。グラウンドゴルフ同好会の発展的組織替えである。協会設立に当たっては、本町、札内両同好会のメンバーと教育委員会が準備を進めていたもので、当時500人をこえる町民がパークゴルフを楽しんでいる状況であったが、今後の発展を考えると同好会を一本化した組織として協会をつくり、会員を募ることが急務であると考えた結果であった。

組織としては、企画部、普及指導部を設け、各種事業を推進することになった。選任された初代役員は次のとおりである。 会長 = 福田省市、 副会長 = 小野寺博唱、伊藤一男、 事務局長 = 小椋正（故人）、 同次長 = 三井巖、齊藤久三男、 会計 = 三好政男、 理事 = 前原懿（企画部長）、平塚治郎（普及指導部長）、長谷川弘、笹島登喜生、中村修、知本正、藤原長寿、鈴木重次郎、喜多仁、山角芳信（故人）、小松昌良、東条衛、杉山雪男、久保智、沢田治夫、本間哲也、岩井浩、浅田輝善、瀨瀨末子、逢坂幸次、坂口利久、長谷繁、金岡信子、加藤光人、戸田透（故人）、佐藤富士雄、三好俊一、木藤保一、瀨瀨良征、 監査 = 森脇登、加藤寅雄（故人）

幕別町パークゴルフ協会の初仕事は、教育委員会が同月17日に開催した「十勝管内パークゴルフ指導者養成講習会」への協力であった。当日は、地元幕別町をはじめ管内11町村から教育委員会職員や地域の体育指

導員など38人が参加した。後に国際パークゴルフ協会が、資格制度としての「公認指導員・アドバイザー」の養成をはじめが、パークゴルフの指導者養成講習会としては初めての試みであった。

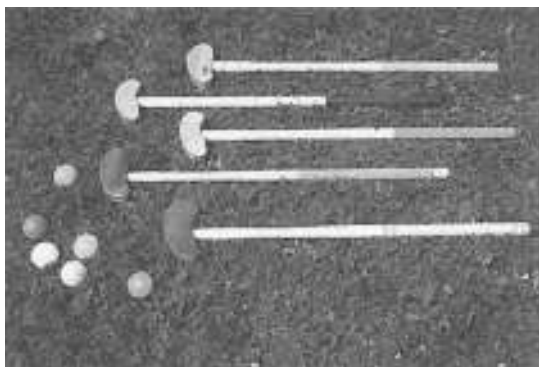
また、幕別町パークゴルフ協会の自主事業として同月28日に「第1回パークゴルフ北海道オープン」がつつじコースで開催された。2ラウンド36ホールで熱戦が繰り広げられたが、結果は男子が横川覚、女子は福田登喜子が優勝、また男女とも6位まで幕別勢が独占した。当時の普及状況を考慮すると当然の結果といえる。なお、参加料は500円、昼食は各自用意の手弁当大会であった。

幕別町パークゴルフ協会は、現在に至るまで各種大会や初心者講習会等を主催したり、幕別町内のコース維持管理に対する協力、国際パークゴルフ協会への協力など、先駆的な活動を続けている。

用具づくり

公園に造ったコースはオリジナル。でも用具が借り物（スティック・ボール・スタート板）のうち、グラウンドゴルフのアレンジの域を出ない。また、破損も激しいため、スティックの打球面に張り物をしたり、ボールにはビニールテープを巻いて補強するなど、それぞれ工夫をしながら使っていた。

こうした状況と並行して、用具の開発は新田ベニヤ工業株式会社十勝工場（古酒昭治工場長、幕別町）＝現、株式会社ニッタクス、本社・東京＝により進められることになった。1983年秋に同社の平塚治郎（取締役業務部長）が教育委員会の依頼を受け、試作に着手することになった。そして3年後の1986年9月に道産のカバ材を使ったスティックとボールが完成し、翌1987年に市販を開始した。これまでスティックは7作目、ボールは5作目という苦心の作であった。



アシックスのスティック(上)と試作

市販のメドが見ついたことでシンボルマークをとということになり、「クマゲラマーク」をIPGAのマークとして商標登録の出願することになった。なお、商標登録の出願は、国際パークゴルフ協会に法人格がないため、新田ベニヤが肩代わりをして出願したものである。後日、株式会社ニッタクスと国際パークゴルフ

を重ねたスティック（クラブ）とボール

協会が覚書を交わして権利関係の所在を確認している。

その後もスティックの改良を重ね、モデルチェンジを機に名称をクラブに変更し現在に至る。また、ボールは木製であるため破損が激しく樹脂のボールに変わった。これも改良を重ね現在のボールになった。

ティについては、特別な規格がなかったため、プレーヤーはそれぞれ自分のティを作っていた。また、ティアップを義務づけてなかったのでティを使わない者もいた。現在市販されているティの原型は前原が考えたもので、事務机の古くなったビニールマットを円形に切り、それに輪切りにした糸入りのビニールホースを接着した物であった。ボールを乗せるとなかなか安定感があり、会心の作といたいところだったが、二つ問題があった。一つは接着面の剥離である。もう一つはボールを打つとティも一緒にかなり前方へ飛んで行くことである。

それぞれ改善をしたわけだが、糊の剥離は厚塗りではほぼ解決した。飛んで行く問題は、だれかのアイディアで糸のボンボリを付けたり、紐に小銭などをしばり飛ばないように工夫して、どうやら手作りティの完成にこぎ着けた。

ホールカップについては、すでに述べたとおりであるが、これにも当然原型があった。最初にエンビ管を埋めるとき、前原は当時の橋本社会体育係長に「直径20センチ程の管を輪切りにしてもらってくれ」と頼んだことから、三井が作った傑作のホールカップの直径も約20センチになったのである。

クラブ、ボール、ティ、ホールカップなどの用具づくりは、こうして試行錯誤を重ねたり、手作りから出発したりして次第にオリジナルスポーツ「パークゴルフ」として出来上がってきたのである。

サーモンコース

つつじコースがパークゴルフ発祥のコースとして知られるが、サーモンコースは、つつじコースとともに国際大会の会場として歴史を重ねている。多くの愛好者からはこの両コースがパークゴルフのメッカといわれている所以である。

しかし、ここまで有名になったサーモンコースも、日の目を見るまでには曲折があった。

1986年当時、教育部長から町経済部長に異動した前原は、振興会議の中で一つの提案を受けていた。それは、三井を筆頭に浅田や長谷などのメンバーが新コースの必要性を訴え、その候補地として「止若（ヤムワッカ）公園」を挙げた。止若公園は役場のすぐ裏手から現在のサーモンコースである河川敷一体をエリアとしている公園で、すでに園路とフラットな芝生広場的な造成が終わっていた。

しかし、問題は町におけるパークゴルフの認知度で、コース造成の予算付けは到底無理であったと思われる。そこで、苦肉の策ではあるが経済部が所管する財団法人幕別町振興公社の事業で行う手法になった。ちなみに振興公社の理事は全員町議会議員で、いわばミニ議会をクリアして実現したコースであった。

産みの苦しみを多少味わったサーモンコースの誕生になるが、幕別町初というかパークゴルフ初のコース設計は高橋政雄（都市計画課事業係長・振興会議メンバー）が担当し、振興会議の意向を十分反映しながら造成工事をする事ができた。

この過程で確認したことの一つにホールの長さ制限があった。現在コースの基準に定められている100m以内のことである。三世代が少しずつ譲り合えば、一緒に遊べるという妥協の設定でありながら、爽快感を味わえるホールにしたいと考えたもので、欲張った理念ではあるが今も多くのパークゴルフファンを生み続けている魅力の一つになっている。当然のことながらカップに向かって思いっきり打てるレイアウトになった。また、当初は役場の裏を下りた所からスタートするコースであったが、管理上の問題が出て3年後に現在のコースに変更された。

1988年には、北海道開発局帯広開発建設部がサーモンコースに隣接した猿別川築堤に、観覧席を兼ねた親

水型の護岸を設置することになり、8月の第2回国際大会に間に合うようにと、幅63～103m、のり面の長さ16mの階段護岸、石張り風のブロックを約1億7千万円で施工した。

以来、国際大会をはじめ多くの大会で開会式・閉会式などに活用し、河川敷利用のあり方を大いにPRする恰好の場所となり、国がパークゴルフをいち早く評価した証でもあった。

第1章 国際パークゴルフ協会の誕生

1987年（昭和62年）1月。教育委員会と幕別町パークゴルフ協会が「パークゴルフ懇談会」を開催している。この懇談会の中で、教育委員会からは、(1)パークゴルフの位置づけをどう考えるか (2)発祥の地として今後の普及対策などが提案され、協会からは、(1)他市町村におけるパークゴルフ普及の状況 (2)パークゴルフの整備の方向 (3)全道・全国・国際的協会の設立に向けて等が報告・提案されている。国際協会設立について話が出た最初の会議であろう。

国際大会の計画が先行

国際パークゴルフ協会の設立については、国際大会の開催計画が先にあって、その受け皿として考えられたというのが定説である。

そのことを裏付けるようなメモが残っている。1986年3月7日に開催された振興会議であるが、案件として、(1)61年度大会日程 (2)コースオープンについて (3)名称の改正（グラウンドゴルフからパークゴルフへ）等を協議決定しているほか、その他として前原の議案の中には「国際大会」と「90周年大会」と書かれていた。

一体だれが「国際大会」の話を持ち出したか分らないが、名称も「パークゴルフ」に変わったこともあり、振興会議のメンバーはやる気満々というか乗りに乗っていた時代で、話が大きくなるのは至極当然といてもいいのではないだろうか。当時の記憶をたどる前原は、「内心エライことになってきた。少し乗り過ぎではないのか」と心配したという。しかし、この熱意に水をさすことは出来ない。怖さもあるが「行ってみるか」と開き直りの心境になったという。

前段の「パークゴルフ懇談会」に戻るが、国際的協会の設立についてどのようなことが話し合われたか、詳しい記録はないが前原が保存している議案には「I P G A」とだけ書かれている。当日の出席者は、教育委員会が、二川勝美教育長・中村覚教育部長・斉藤久三男社会体育係長・林隆則同係、協会からは、福田会長・伊藤副会長・小椋事務局長・前原企画部長・平塚普及指導部長・三井・加藤・長谷・岩井の各理事である。

この懇談会の協議内容を受けて、協会は2月12日に内部協議会を開いているが、企画部の協議事項のなかで、国際協会の設立が話され、他府県へ普及を図ること、I P G A ニュースの発行などのメモが残っている。また、ビデオの作成を浅田、長谷の両理事が担当することになっている。

なお、1987年度当初の普及状況は、幕別町以外でコースが出来ているところが新得町、鹿追町、士幌町、中札内村、池田町、上富良野町、登別市の7市町村と摩周国際ホテル、問い合わせや視察があったところとして清水町、上士幌町、音更町、陸別町、足寄町、本別町、浦幌町、豊頃町、札幌市、岩見沢市、滝川市、士別市、旭川市、網走市、函館市、平取町、釧路町、弟子屈町、鶴川町、留萌支庁、福井県丸岡町、宮崎県国富町、群馬県長野原町の24市町村と帯広緑ヶ丘病院、滝川青年会議所、リオス設計事務所（大阪）、河川管理財団、藤原建設などとなっている。

4月3日に協会企画部の会議が開催された。この中で、年間の大会予定や協会が主催する大会、教育委員会が主催する大会などの振り分けについて協議しているが、国際大会の骨格についても協議された。

国際大会を8月下旬に行うことを前提に、(1)国際パークゴルフ協会設立記念として前夜祭を行う (2)事前の宣伝 (3)国際協会会長の就任挨拶 (4)全国に案内状 (5)外国人の参加（畜大やロランC基地など） (6)通訳の手配 (7)ホール数 (8)参加費等である。

いよいよ本決まりとなった「国際大会」開催の具体的打ち合わせが始まる。6月9日の振興会議では、パークゴルフ国際大会について（協会設立準備を含む）の議案が提案され、大会の具体的内容を協議したほか、協会設立に関して(1)総会の時期は (2)会長ほか役員などが話し合われたが、この時点ではまだ設立の時期が決まっていなかったようである。

設立総会の時期決まる

その後、協会企画部を中心にして、国際大会の開催時期、国際パークゴルフ協会の設立時期など内部協議がしばしば行われた結果、「パークゴルフ国際大会」を8月23日とし、その前日の22日に「国際パークゴルフ協会」設立総会を開催することになった。いよいよ案内状が発送されたが、その全文は次のとおりである。

昭和62年7月23日
国際パークゴルフ協会設立準備委員会
幕別町パークゴルフ協会会長 福田省市

国際パークゴルフ協会設立総会のご案内について

子供からお年寄りまで楽しむことができるコミュニティスポーツ「パークゴルフ」が幕別町で生まれて4年がたちました。この間、北海道内はもとより日本全国から問い合わせをいただき大きな広がりを見せています。

私たちは、このコミュニティスポーツ「パークゴルフ」を愛好する人たちの交流と親睦、さらには国際的スポーツとしての普及を目的に国際協会設立を企画いたしました。

つきましては、趣旨をご理解のうえご賛同いただき、国際協会設立総会にご出席いただきますようお願い申し上げます。

記

- 1 とき 昭和62年8月22日(土) 午後2時
- 2 ところ 国民宿舎 幕別温泉ホテル

発送先は、十勝管内は音更町、士幌町、鹿追町、新得町、清水町、中札内村、更別村、池田町、豊頃町、陸別町、上士幌町(民間)、本別町、足寄町と地元幕別町。管外は弟子屈町(民間)、平取町、釧路市、上富良野町、音別町、苫小牧市(民間)、室蘭市。道外は志賀高原一の瀬旅館組合、志賀高原天ヶ原旅館組合、志賀高原サンバレー旅館組合、埼玉県浦和市萩原茂裕・良子、千葉県船橋市押塚登喜夫(日本レクリ

ーション協会)。このほかブリヂストンスポーツ（国際大会共催企業）、新田ベニヤ工業、西岡建設など。

総会で規約や初代役員決まる

設立総会は、8月22日午後2時から開かれた。総会には十勝管内のほか苫小牧市、室蘭市、弟子屈町など、30人程が出席したほか、長野県志賀高原の各旅館組合など委任状が寄せられ、加盟を希望する団体は39に達した。伊藤一男（幕別町協会副会長）が開会宣言をし、議長に前原懿（幕別町協会企画部長）が選ばれて議事が進行した。

最初に、三井巖（幕別町協会理事）から、国際パークゴルフ協会設立に関する経過報告がされたが、次のとおりである。

国際パークゴルフ協会設立に関する経過報告

本日、国際パークゴルフ協会設立総会が開催されるにあたり、ここに至る経過についてご報告申し上げます。

はじめに、パークゴルフがどのようにして誕生したか、また、今日までどのような普及発展をしたかについて若干説明をさせていただきます。

パークゴルフは昭和58年に、グラウンドゴルフ（これは、その名のとおり、学校のグラウンドなど土の上でするゲームであります。）をアレンジして幕別町で生まれました。そもそもの発想は「公園をもっと楽しく・町民の遊びの場にしよう」そんなに広い公園でなくてもゴルフの気分は味わえる、そんなことでありました。そして、子供から高齢の人までが楽しめるコミュニティスポーツとして成長をしてまいりました。

こんなに楽しいスポーツを、ひとり幕別町民だけが楽しんでいいのだろうか、そんな声が愛好者の中から沸き起こり、積極的には昨年からは北海道内をはじめ道外にも普及を図ってまいりました。その間、地元企業による用具の開発、ルールの統一、標準コースの設



国際パークゴルフ協会設立総会

定、町協会の設立など条件の整備を進めてきたところであります。

国際パークゴルフ協会設立の機運につきましては、町内の大会や十勝大会、全道大会などを幕別町で開催してきた経験から、こんな面白いスポーツが外国にも普及できたらと、そんな夢のような話がきっかけで、それでは取りあえず十勝管内に住む外国人に呼びかけて、国際パークゴルフ大会をやってみようというところまで発展し、春以未その準備を進めてきたわけであり

ます。普及を図ってきた成果としてコースの造成も幕別町の7コースをはじめ、十勝管内20コース（造成中を含む）、道内（十勝管外）10コース、道外4コース、合計41コースとなり、愛好者の数もおよそ3,000人を数えるところまで発展している現状を踏まえ、国際大会を契機として近い将来、外国にもぜひパークゴルフの普及を図り、ささやかな国際親善を目的とした国際パークゴルフ協会の設立を計画してきたところであります。

本日ご案内の設立総会は、幕別町パークゴルフ協会が主体となって準備をさせていただきましたが、その趣旨にご賛同くださいますようお願いいたします。ただ、大事なことは、このスポーツは競技スポーツではなく、コミュニティスポーツあるいはレクリエーションスポーツであること、そして本日設立される協会は、生まれたての赤ちゃんであり、これから皆さんの手によって育まれるものであるということです。

以上、国際パークゴルフ協会設立に至る経過を概略ご報告いたしまして、皆様方のご理解をいただきますようお願い申し上げます。

次に規約を承認したが、国際パークゴルフ協会最初の規約は次のとおりである。

国際パークゴルフ協会規約

（名称）

第1条 この会は、国際パークゴルフ協会（IPGA）と称する。

（目的）

第2条 本会は、パークゴルフを「一生の友」とする愛好者の交流と親睦を図り、国際的なコミュニティスポーツとしての普及を目的とする。

（事務局）

第3条 本会の事務局を幕別町教育委員会内に置く。

（事業）

第4条 本会は目的達成のため次の事業を行う。

- (1) 国際大会（年1回）
- (2) 交流会（年1回）
- (3) 各地区大会（随時）
- (4) 指導普及に関する研修会（指導者資格講習会）
- (5) 総会
- (6) その他本会の目的達成に必要な事業

（会員）

第5条 本会はパークゴルフの愛好者であれば資格を与え、加入は団体または個人とする。

2 本会の加入・脱会は、総会で決議する。

（役員）

第6条 本会に次の役員を置く。

会長 1名 副会長 2名 理事 若干名
会計監事 2名 事務局長 1名（事務局長員若干名）

2 役員任期は2年とする。ただし、再任は妨げない。

3 本会に名誉会長を置くことができる。

（会計）

第7条 本会の運営経費は次の収入をもって充てる。

- (1) 賛助会費
- (2) 事業収入
- (3) 寄付金

2 収入の報告は総会の都度行う。

（その他）

第8条 この定めのほか、会の運営に必要な事項が生じた場合は会長が定める。

附則

この規約は昭和62年8月22日から適用する。

承認された規約により、役員を選出が行われたが初代役員は次のとおり。 会長 = 福田省市（幕別）
副会長 = 後藤辰雄（土幌町、故人）、新田ベニヤ工業
理事 = 加盟団体の代表 会計監事 = 小松昌良
（幕別）・鈴木重次郎（同） 事務局長 = 前原懿
（幕別）。

初代会長に選出された福田省市の就任挨拶があった後、すでに準備が完了している「パークゴルフ国際大会」を翌日開催することを承認し、さらに来年以降についても毎年パークゴルフ発祥の地幕別町で開催することを決定した。

このように、国際大会を翌日にして国際パークゴルフ協会が設立されるという、悪く言えば泥縄的な運び方であった。しかし、これに異論一つ出なかったのは、参加者の気持ちパークゴルフの一点で結ばれていたからであったと思われる。

第2章 第1回国際大会

1987年4月3日の幕別町協会企画部の会議で国際大会を8月下旬を予定し、内容についても大まかな意見交換をしたことは前述したところだが、この会議には昭和62年度大会として、(1)家庭内のコミュニティ大会 (2)底辺拡大のための大会 (3)振興普及のための大会 (4)長期にわたる大会などに分類し、次の大会が提案された。

(1)親子・夫婦大会(ファミリー大会) (2)レディスカップ (3)シルバーカップ (4)ジュニア大会 (5)高校対抗戦 (6)公区対抗戦(公区=自治会) (7)開基91年・チャレンジ91 (8)国際大会 (9)全道オープン (10)十勝大会 (11)全町大会 (12)NHKまたは他テレビ局杯 (13)新人王決定戦 (14)チャンピオン・カーニバル (15)早朝リーグ戦 (16)パークゴルフ夏場所などであったが、これらの大会を全て行うというのではなく、出来るものからアタックすることを前提として話し合った。

北海道オープンやチャレンジ91のように、すでに行われていた大会もあり、あまりたくさんの大会を計画しても運営は無理である。一気に背伸びしないことで話がまとまった。結局、62年度の大会は、国際大会に最大のエネルギーを注ぎ、外にレディス大会、シルバー大会を加えることになった。

準備委員会が活躍

新年度に入り、パークゴルフに関わる町、教育委員会の職員や町の人などで「第1回パークゴルフ国際大会準備委員会」をつくり、文字どおり手さぐりの準備に入った。準備委員会のメンバーは次のとおりである。

前原懿（町協会企画部長）、平塚治郎（同普及指導部長）、三井巖（同理事）、本間哲也（町観光協会事務局）、岩井浩（新田ベニヤ）、逢坂幸次（逢坂スポーツ）、久保智（久保商店）、大上雄治（商工会青年部）、野村武志（同）、伊藤一男（町協会副会長）、瀨瀨良征（幕別温泉）、加藤光人（都市計画課）、菅好弘（教育委員会）、長谷繁（開発商工課）、浅田輝善（企画調整課）。準備委員会のまとめ役は前原であったが、大会全体の素案づくりは浅田が行い、何度となく協議を重ねた。



連夜の準備作業風景

国際大会と銘打った以上どれだけ外国人に参加してもらえるかである。最初から十勝管内に在住する外国人と範囲を決めたご近所サイズの国際交流ではあったが、まとめ役の前原は在住外国人の実態もよく分からず不安であったが、それぞれの情報や意見で少しは先が見えてきた。

一つは、帯広畜産大学の留学生である。こちらの担当は教育委員会の菅が対応することになった。もう一つは、浦幌町にある米軍基地ロランC局の隊員であった。こちらの方は、浅田が担当し隊員と交遊関係を持つ浦幌町の木下政憲に対応を依頼することができた。このほかにも、いろんな人の協力で招待する外国人については一応のメドがついた。しかし、これだけでは済まない。畜大生にしてもロランCの隊員にしてもプレーしたことがないはずだ。パークゴルフがいかに手軽、気軽なスポーツといってもぶっつけ本番では乱暴すぎる。そこで、大会前に幕別町のコースで体験をしてもらったところ、彼らはパークゴルフが大いに気に入ったようであった。

このように準備委員会は、後の大会役員にバトンタッチするまでの裏方の仕事であったが、実際は大会要綱を事実上決めたり、これによる準備手筈を整えるため、役場の2階会議室に準備室を構えて、大会前の2カ月弱の間は毎晩遅くまで仕事をしたが、全てはゼロからの出発で随分苦労があった。しかし、何かを創造するという熱意は次々とアイデアを生んだり、慣

れないこともチームワークで乗り越えた。

例えば参加国の国旗や参加市町村章を開・閉会式場に飾ることにしたが、一体だれが描くかというとき、野村がこれを引受けた。それまで、野村にこのような持技があることはあまり知られていなかったが、結果は素晴らしい出来ばえで、関係者は大いに感嘆した。

また、開会式に可愛いバトンガールの先導を提案したり、プラカードを役場女子職員に持ってもらうなども、準備作業の中で生まれたアイデアであった。

実行委員会で要綱確定

8月7日に「第1回パークゴルフ国際大会開催に当たっての役員依頼について」の文書が実行委員長・福田省市名で関係者に発送され、同月10日には1回目の実行委員会が開催されている。

実行委員会の内容は、大会役員の決定と大会の開催要綱の確定であった。総務・設営・競技の役員にそれぞれ準備委員をはじめ必要な人員が配置され、大会前日の準備から当日の運営に当たった。これらは当然のことボランティアで、役場職員や商工会、協会理事など総勢65人を数えた。確定した開催要綱は次のとおりである。

第1回ブリヂストンスポーツ杯パークゴルフ国際大会開催要綱

- 1 目的 子どもからお年寄りまで楽しむことのできるコミュニティスポーツ「パークゴルフ」を通して、広く世界の人々と交流を図り、地域文化・スポーツの高まりと、「パークゴルフ」が世界的なスポーツとして広がることを願い開催する。
- 2 主催 国際パークゴルフ協会 ブリヂストンスポーツ北海道販売(株)
- 3 主管 パークゴルフ国際大会実行委員会・幕別町パークゴルフ協会
- 4 後援 幕別町・幕別町教育委員会・幕別町商工会・幕別町観光協会・幕別町郵便局・北海道拓殖銀行・十勝信用組合・新田ベニヤ(株)・北海道新聞社・十

- 勝毎日新聞社・北海タイムス社・東北海道新聞社
5 期 日 昭和62年8月23日(日) 午前9時
6 会 場 つつじコース(幕別町運動公園)・
サーモンコース 7 参加対象 パークゴルフ愛好者
8 参加料 1,500円(交流会費・保険料を含む)
9 競技方法
(1)種目 男・女別
(2)方法 36ホール(同順位の場合、優勝・準優勝のみサドンデスプレーオフとし以下(入賞者)は抽選とする。)
10 表 彰
・(男子)優勝～第10位
・(女子)優勝～第5位
・外国人賞・全員に参加記念賞
11 交流会 大会終了後、参加者で交流会を行います。
-

知事杯を申請

北海道知事・横路孝弘が8月21日に十勝入りした。22日午後帯広市で開かれる「帯広経済文化会議」出席のためだったが、22日朝、パークゴルフ体験のため幕別町を訪問することになった。以前から幕別町長名で知事杯を申請していたが北海道議会議員(幕別町)保格博夫の尽力で実現し、知事杯引き渡しを兼ねての訪問であった。



横路知事から知事杯を受け取る林町長

当日午前8時過ぎ、知事一行はパークゴルフ発祥の「つつじコース」に到着した。林照男幕別町長をはじめ、福田(幕別町パークゴルフ協会会長)ほか関係者数10名が集まり、前原(幕別町総務部長)がパークゴルフについて発祥から現状について説明をし、知事から林町長に知事杯が手渡され、町長から福田会長へと手渡された。

福田会長のお礼の言葉の後、早速関係者が同伴して知事に初体験してもらった。つつじコースAの1番ホール、ティグランドから第1打をショットした瞬間、大きな歓声が上がった。それは記念すべき知事の第1打だから、ではなくゴルフのドライバーを振り回すような猛烈なショットで、ボールは遙かカップを越えて飛んで行ってしまったからであった。

知事は、パークゴルフに対して好意的なコメントを残し、4ホールほど体験して幕別町を去った。

開会式に不安と興奮

1987年（昭和62年）8月23日午前9時。バトンガールの先導で各国選手団がプラカードを掲げて入場。参加国は、アメリカ、中国、カナダ、フィリピン、イラク、スリランカと日本の7カ国。参加した選手は、外国人が28人、東京、大阪などの町外から83人、町内から84人の計195人である。



プラカードの先導で各国選手入場

開会式は現在つつじコース・ゼロ番ホールとなっている芝生広場で行われたが、この日は朝から快晴、最高気温も30度を超える真夏の暑さとなったが、北海道の短い夏の日を楽しむパークゴルフには最適の日であった。

開会式の模様は次のとおりである。

- 1 開会宣言 幕別町パークゴルフ協会副会長
伊藤一男
- 2 大会長挨拶 大会長（国際パークゴルフ協会会長）
福田省市
- 3 歓迎のことば 幕別町長 林照男
- 4 祝辞 北海道知事 横路孝弘（代理）、
北海道議会議員 保格博夫

代読された知事のメッセージ

幕別町の皆さんが熱い思いで待ち望んでいた第1回パークゴルフ国際大会の開催を心からお祝い申し上げます。

北海道にまた一つ、このように新しい入スポーツの祭典が誕生したことは、たいへん素晴らしいことです。

私は従来から道民の皆さんが豊かな自然を大いに活用し、スポーツやレクリエーションを思いきり楽しむことによって、生き生きとした毎日を送ってほしいと思ってまいりました。幕別町で生まれたパークゴルフが今では、道内はもとより全国的に普及し、子供からお年寄りまで幅広い層の多くの皆さんに親しまれていることは、たいへんよろこばしいことです。

記念すべき第1回大会に出場される皆さんには、緑豊かなこの公園で力いっぱいのプレーをされ、さわやかな汗を流していただきたいと思います。

この大会での盛り上がりが大きくなるとなり、今後開催される第2回大会、そして第3回大会への成功につながることを心から期待し、お祝いの言葉といたします。

昭和62年8月23日 北海道知事 横路孝弘

5 競技説明 幕別町パークゴルフ協会普及指導部長 平塚次郎

6 招待選手紹介と記念品贈呈 外国人参加選手団を国別に紹介し、パークゴルフスティック(クラブ)を贈呈した。

7 選手宣誓 アル・ダバグ・ファワズ・アブドゥハブ(帯広畜産大学留学生・イラク)

オープニングセレモニーは以上であったが、この大会に「日本ふるさと塾」の萩原茂裕から心温まるメッセージが寄せられた。

第1回パークゴルフ国際大会にあたって

とうとうやってきましたね。幕別さん。国民宿舎にしても、ふるさと館にしても、いつも世に先駆けるのが幕別町ですね。しかも、総てがしっかりと台地に根をはっています。敬服します。

今度は、パークゴルフとききましたね。名前を聞いただけで、皆さんの意図が私には判りません。

最初に、パークとききましたから、公園を使う気だなと考えました。

幕別町は、いつもそのまち自身を使うからです。多くの公園は、住民が遊ぶ処なのに、公園が遊んでいます。芝生に入るなど立て札を出している処すらあります。

公園に限らず、自分の処の物を使わずに、他所から物を持ってくることばかり考えがちです。

パークゴルフは、身近にある公園を使い、地元の優秀な企業の技術を応用し、しかも地元で考えたのです。だから、素晴らしいと思うのです。

身近な場所×地元の技術×地元の発想×等々。3+3=6ですが、3×3=9です。

まさしく、これこそ真の一村一品です。
そして、品物売る町は最近沢山ありますが、幕別町はスポーツを全国に売り歩いているのですから立派です。
今回は、世界に売り付けようとしている訳ですね。頑張ってください。いつのオリンピ、ング種目に採用させるつもりですか。
その時のオリンピック選手は幕別町民ですね。
昭和62年8月20日 日本ふるさと塾 萩原茂裕

競技開始に先立って行われた始球式のセレモニーは、主催者のプリヂストンスポーツ北海道販売(株)社長 津田明夫、北海道知事 横路孝弘(代理)、幕別町長 林照男、招待選手代表 ロバート・ウォルター(U S A)、ダクシカ・スマナシリ(スリランカ)、大会長 福田省市、幕別町選手代表 木川拓二で行われ、ピンクや青の煙が芝生を這った。同時に花火が打ち上げられ、参加選手はそれぞれサーモンコース、つつじコースへと散っていった。

第1回パークゴルフ国際大会は、こうして歴史的な時を刻みはじめたのである。



つつじコースを回る外国人選手

初代チャンピオン決まる

外国人を各組に散りばめてスタートしたが、果して日本選手とのコミュニケーションがうまくいくものか心配された。そのために17人のボランティア通訳を配置して万全を期した。ところが、確かに最初のうちは通訳を必要とする場面も散見されたが、そのうちにお互いがスッカリ伸良くなって、手真似や表情など世界共通ともいえる方法で分かり合い、リラックスした日本選手が時には英単語を使いだしたり、歓声と笑い声がコースのあちこちに響きわたった。

こうした様子を見て、不安を抱きながらも連日連夜の苦勞を重ねて準備をしてきた準備委員会のメンバーは、大成功を確信したという。

陽も西に傾きはじめて午後3時近くになり、プレーは終了し、初代チャンピオンが決定した。閉会式が始

まり、選手たちは開会式の時と違って笑顔一杯の和やかさに包まれた。成績発表が行われ、表彰となった。表彰される選手は、晴れがましい表情で前へ出る。選手団からは祝福の拍手や歓声が止まない。

栄光の初代チャンピオンは、全体を通じ男子が4人のプレーオフの末、木村徳男（幕別町）が、女子は宮島巴枝（幕別町）が勝ち取った。招待の外国人の初代チャンピオンは、男子がスコット・バーネス（USA）、女子はダクシカ・スマナシリ（スリランカ）となった。

交流会は親善の絆

閉会式が終わって、最後のイベントである交流会が始まった。バーベキュー・パーティである。焼き肉をメインディッシュとして、ゆでトウモロコシやジャガイモ、焼きイカなどの海の幸におにぎりなど、飲み物はビール、焼酎、ワイン、ジュース類。真っ赤に日焼けした参加選手がお互いの検討をたたえあったり、ここでも手真似を交えた国際親善交流が続いた。



夕暮れを過ぎても終わらない交流会

協賛企業などから提供されたラッキー賞の抽選が始まると、交流会は最高潮に達し、中でもサーモン大賞のあきあじ（さけ）1本、つつじ大賞の自転車、最も興奮したのはパークゴルフ大賞であった。これはスクーター1台で、そのくじはロランC基地の米兵ロバート・ウォルターが引き当て、本人は当然のこと同僚たちは奇声を上げての喜び様で会場は歓声に包まれた。

交流会は、予定を過ぎても終わらず、結局陽も沈み始めるころになって、ようやく万歳をして散会となった。成功のうちに「第1回パークゴルフ国際大会」の全てが終わったが、参加選手の姿が見えなくなっても、笑顔や、笑い声、歓声の余韻はいつまでも残って関係者は喜びに浸っていた。

第1回の成功は、国際パークゴルフ協会関係者の自信となり、第2回目へと夢をつなげていく。

第1回大会の記録

ここで、この記念すべき第1回大会に理解を示し金品の応援をした商店や企業、団体などを記録する。
(順不同・敏称略)

有沢呉服店、有限会社大上電気工業、有限会社小尾商店、帯広信用金庫札内支店、景山医院、勝山医院、亀山建設工業(株)、木川拓二、久保企物店、有限会社瀨瀨鉄工、(株)駒野製パン所、理容佐々木、有限会社佐藤建設、佐山採石総合プラント有限会社、有限会社笹井金物店、笹島商店、札内農業協同組合、(株)沢井工業、三共舗道(株)帯広出張所、参星堂薬局、しちふくや、有限会社神馬建設工業、杉野菓子店、太平洋建設(株)帯広支店、有限会社竹葉観光、辰巳寿し、十勝信用組合幕別支店、東興ブロック興業(株)、東光印刷(株)、東洋土木(株)、東横ブロック工業(株)、錦産業有限会社、日成ブロック工業(株)、新田ベニヤ工業(株)、のむら呉服店、有限会社ハヤツ薬局、有限会社藤平商店、藤原工業(株)、ホームプラザ、北王コンサルタント(株)、北海道拓殖銀行幕別特別出張所、有限会社マルダイマート、有限会社マルトヨ商事、有限会社前多建設、幕別町、幕別町議会、幕別町農業協同組合、幕別町役場職員交友会、幕別郵便局、丸仁登技研(株)、丸朋建設(株)、三井理容院、三好自転車商会、森若建設(株)、若月食堂、駒島農産組合。

大会役員は次のとおりである。

名誉大会長 津田明夫(ブリヂストンスポーツ北海道販売(株)社長) 大会顧問 横路孝弘(北海道知事)、林照男(幕別町長)、関口茂男(幕別町議会議長)、木川拓二(幕別町商工会長)、大久保正司(幕別町観光協会長)、二川勝美(幕別町教育長)、萩原茂裕(日本ふるさと塾主宰)、高山悌二(幕別郵便局長)、新田忠(新田ベニヤ工業(株)社長) 大会長 福田省市(幕別町パークゴルフ協会長) 競技委員長 平塚治郎(幕別町パークゴルフ協会普及指導部長) 副競技委員長 加藤光人(幕別町パークゴルフ協会理事) 総務委員長 伊藤一男(幕別町パークゴルフ協会副会長) 総務副会長 小野寺博昭(幕別町パークゴルフ協会副会長) 設営委員長 本間哲也(幕別町パークゴルフ協会理事) 設営副委員長 杉山雪男(幕別町パークゴルフ協会理事)、事務局長 前原懿(幕別町パークゴルフ企画部長) 事務局次長 本保喜秀(幕別町教育委員会社会教育課長) 同三井巖(幕別町パークゴルフ協会事務局)

長)、同菅好弘(幕別町パークゴルフ協会事務局次長)

大会収支決算は次のとおりである。

収入の部 参加料231,000円、賛助金612,000円、雑収入(役員帽子代)40,400円、計883,400円。
支出の部 事務費・商品代・会議費など計881,433円
残金1,967円は第2回大会経費として繰り越す。

第3章 普及活動

パークゴルフは、もともと自分たちの遊びの創造を原点に、自分たちが面白いものなら町民に勧める価値があるはずだ。そんな思いで始まったスポーツであったから、最初のうちはどれだけ町民に受け入れられるかが一番の関心事であった。

また、勝手に公園に足を踏み入れたものだから、いつ何処からクレームがつくか判らない。発想の提案者として前原は、後ろめたさを引きずりながらも何とか町民に広めたいと考え、そのために世代や性別などの壁のない遊びとして進めたいと考えた。

幸い愛好者も着実に増加し、町民のスポーツとして成長させようと、役場庁舎内に「グラウンドゴルフ振興会議」が1985年春に設置されたが、振興会議のメンバーの心は早くも町外、全国への音及に動いていた。

全道にパンフを送る

国際パークゴルフ協会が発行している小さな折りたたみ式のパンフレットがある。パークゴルフの簡単なマナー、ルールと、幕別町のコースをいくつか紹介したものだが、最初に発行したのは1986年である。まだ、国際パークゴルフ協会が設立されていないころのもので、幕別町教育委員会の発行であった。

1987年に国際パークゴルフ協会が設立され、このパンフ発行は同協会へと引き継がれた。最初のパンフは全道211市町村へ発送されたが、以後全道からの視察問い合わせが急増した。現在でも、このパンフは視察者や問い合わせに対する基本資料として、なくてはならないものとなっている。

通常パンフレットは、視察や問い合わせに対して使われる程度のものだが、これを全道市町村に送ったことが普及活動を活発にした。このような仕事を企画したのも「振興会議」の功績の一つであろう。

普及プロモーションビデオを製作

普及のためのビデオ製作は、パンフレット発行のころすでに振興会議で話し合われていた。これが国際パークゴルフ協会の設立により具体化したものである。

パークゴルフという新しいスポーツを理解してもらうためには、ビジュアルな資料が欲しかったが、制作費のことを考えるとそう簡単ではなかった。しかし、幕別町の協力もあり現実のものとなった。

1987年10月上旬にビデオは完成したが、もちろんカラーで15分程度の長さであった。内容は、つつじ・サーモンコースを使ってパークゴルフのマナーやルールを分かりやすく解説し、小さな子供や高齢の人も楽しむことができるコミュニティ・スポーツとして、パークゴルフを売り出そうとするものであった。

この普及用ビデオは、全道全国へと送り出され、その後のパークゴルフの普及に大きな役割を果たす資料となった。現在は第2作のものが同様に活用されているが、主に道外に対する資料となっている。

全国レクリエーション大会に参加

1987年10月16日から18日までの3日間、第41回全国レクリエーション大会が山形市で開催された。この大会は、財団法人日本レクリエーション協会が主催する全国レクリエーション関係者団体等の祭典である。

日程のなかでパークゴルフを全国に紹介するチャンスが到来したのである。

ここで、参加に至る経過を辿っておく必要がある。同年2月26日、前原と三井が浦和市の萩原茂裕を訪問

した。萩原は、町づくりのコンサルタントとして全国の市町村には知られた存在で、各地から講演依頼の絶えない多忙な日々を送る人物であった。（幕別町総合計画を手がけた。第1回国際大会にメッセージを寄せた。）

訪問の目的は、全国を駆け回る萩原にパークゴルフの紹介を願うためであったが、萩原はその日不在で、出迎えてくれたのは妻の良子であった。しかし、結果としては良子の知人の小塚が同席して日本レクリエーション協会の押塚登喜夫主幹を紹介してくれることになった。

前原と三井は、日レクの全国大会が翌年8月に函館で開催されることを知っていたので、これにデモンストレーション参加を依頼する予定を立てたが、押塚が函館大会の事前協議の日程を調整して幕別町まで足を伸ばしてくれることになった。



蔵王スキー場に特設コースを造るスタッフ

6月25日、押塚は、つつじコースでパークゴルフを体験した。後日押塚からの連絡で、同年10月の山形大会に参加してはと勧められることになった。前原と三井は、参加の方向で早速振興会議のメンバーや幕別町協会との協議に入ったが、8月22日には国際パークゴルフ協会が設立され、10月の大会参加は国際パークゴルフ協会と幕別町が協力のうえ実現した。

参加者は、前原、平塚、三井、本間、菅の5人に、新田ベニヤ本社の前沢と萩原良子が東京から参加した。山形市蔵王スキー場のゲレンデの一部に9ホールの体験コースを参加者で造成した。しかし、予定の日には季節外れの台風の余波で使用不可能となり、急遽体育館で説明をしながらのデモンストレーションを行った。また、用具用品の展示コーナーが与えられ、パンフレットのほか新田ベニヤの協力で用具一式を展示したが、この大会のため製作を急いだビデオも展示場に流すことができ、時々人恒ができるほどの関心と呼んで、いた。

前年に長野県志賀高原にパークゴルフの普及を図って以来、2度目の道外普及の機会であったが、せっかく造成したコースでのデモンストレーションが不能になり、残念な部分もあったが、一応の成果をあげた行動であった。

日レクとの間を仲介した萩原良子は、その後何度か幕別町を訪れ国際大会にも参加した。また、全国各地

にパークゴルフの素晴らしさを伝えている。国際パークゴルフ協会としては、パークゴルフの理解者として心強い存在である。

マスコミへのアプローチ

1993年（平成5年）幕別町はパークゴルフ発祥10周年を迎え、これを記念して各種事業を行った。

この年の4月には、教育委員会社会教育課にパークゴルフ振興係を新設した。全国各地に広がるパークゴルフ、発祥の町としてこれに対応するために作った専属の係である。初代係長には、かつて振興会議のメンバーでもあった浅田輝善が発令された。

浅田が最初に手がけた仕事がパークゴルフ発祥10周年の記念事業で、9月11日の記念武典をはじめ、本の出版など幾つかの事業を展開した。この中で「クマガラハウス」に10年の歴史をパネルで展示しようとしたが、資料がそろわない。そこで当時教育長であった前原に相談した。浅田は前原がパークゴルフに関する新聞記事を細大漏らさずスクラップしていることを知っていたからである。

行政が自らの事務事業の記録を新聞記事に求めるといふ不思議な出来事だったが、パークゴルフは、それだけ新聞などマスコミの報道対象になっている証拠でもあった。

しかし、パークゴルフ発祥のころを振りかえると、必ずしもそうではなかった。1983年（昭和58年）パークゴルフが生まれたその年、新聞には全く登場しない。というよりは、売り込む程の自信がなかったのかも知れない。

前原が保存しているコピーを辿ると、パークゴルフが初めて新聞に登場したのは、1984年の春、パークゴルフ発祥の翌年である。まだ、グラウンドゴルフの用具を借りていたころであったが、教育委員会としては広く町民が楽しめるスポーツとして普及させようとして計画していた。こうした内容の報道であったが、パークゴルフに関して初めて新聞に売り込んだのではないかと思われる。



パークゴルフの新聞報道第1号

この報道がマスコミの関心を呼んだのか、同年10月に初めて開催された大会の予告記事や結果の記事が大きな見出しで新聞に載った。

翌年設置された振興会議は、マスコミに対する売り込みを大きな目的の一つとし、新聞、テレビ、情報誌などあらゆる方面にアプローチすることになった。

パークゴルフが初めてテレビに登場したのは、1986年（昭和61年）である。この年の7月13日に開催された「パークゴルフ・チャレンジ90」、幕別町開基90周年を記念して始まった大会であった。つつじ・エルムコースを2ラウンド72ホール、俳句村コースを1ラウンド18ホール計90ホールを1日で回る大会であったが、この日つつじコースで前原がNHKのインタビューを受けた。

事前にNHKから話があったが、振興会議のメンバーで相談の結果、発案者の前原がインタビューを受けることになり、前原も個人を売るのではなく町のPRのためと割り切った。以後、テレビ取材はSTV、HBC、HTB、UHBと各社に及び、最初は十勝管内のローカル放送であったが、次第に大きく扱われようになり、全道、全国放送へと、さまざまな角度でとりあげられた。

取材をしたアナウンサーは、いつの間にか転勤し、ある日突然東京や北陸、四国などからの報道で突然ブラウン管に登場し、関係者は思わぬ再会に驚いたり懐かしんだ。

国際パークゴルフ協会が設立されてからも、新聞、テレビの報道は極めて好意的で幕別町生まれのニュースポーツを十勝、北海道のスポーツへと視野を広げ積極的にとり上げ、パークゴルフの普及振興に大きな力となっている。

新聞では、十勝ローカルの視点で十勝毎日新聞の報道が最も多く、また、北海道新聞の報道は十勝ローカルのほか全道版で大きくパークゴルフをとり上げている。この他、北海タイムスや廃刊になったが東北海道新聞、朝日・読売・毎日・日経の全国紙など、さらには道新スポーツも、しばしばパークゴルフの記事を掲載している。

また、現代用語の基礎知識、イミダスなどの情報誌、行政や企業の広報誌など多岐にわたって掲載され

ている。

振興会議から国際パークゴルフ協会へと、マスコミに対するアプローチは続くが、期待以上の扱いとなって報道され、パークゴルフの普及振興に弾みがついていることは疑う余地がない。また見方を変えれば、パークゴルフにはそれだけの魅力があるともいえるのではないか。

第4章 組織づくりの歴史

1987年（昭和62年）8月22日、第1回国際大会の前日に「国際パークゴルフ協会」が設立された経緯と、設立総会において決定された事項や初代の役員は「第1章 国際パークゴルフ協会の誕生」で詳しく述べたが、国際協会はその後、パークゴルフの急速な普及と加盟団体の急増で、組織の整備が遅れがちな状況が続いている。

理事会と協会運営組織

昭和63年度第1回理事会は、6月14日に幕別町民会館内図書室で開催された。審議事項は、(1)昭和62年度事業報告 (2)同決算報告 (3)63年度事業計画 (4)同収支予算 (5)会員章の作成 (6)公認指導員の認定制度 (7)規約の見直し等であった。この中で(7)規約の見直しについては、第5条（会員）の資格で「加入は団体または個人」となっていたが、これを「加入は団体または賛助団体」と改め、第8条（会計）の運営経費に「加盟団体負担金（年額10,000円）」が加えられた。第2回理事会は、平成元年3月11日に国民宿舎幕別温泉ホテルで開催され、63年度事業報告・決算、平成元年度事業計画・収支予算のほか、役員改選を行った。事業計画の中では、初めての公認指導員認定会を7月14日に行うことを決めている。役員は全員が再任された。



100人が出席した平成9年度理事会

平成元年度第1回理事会は、平成2年3月10日に国民宿舎幕別温泉ホテルで開催されたが、特別の事業や変更等はなかった。IPGAニュースは元年度に第4号を発行している。

平成3年度第1回理事会は、平成3年3月9日に幕別温泉パークホテルで開催された。この年規約の一部改正があり、第6条（役員）第3項で「名誉会長」のほか「顧問」を置くことができる。となり、この年が

ら役員会を常任理事会に改め、第5条以下関係条文を改正した。

平成4年度第1回理事会は、平成4年3月14日に十勝川温泉グランドホテル雨宮館で開催された。加盟団体の増加にともない、国際協会組織の充実が求められる時代になり、必要な地域に支部を置くことになった。関係条文の規約改正を行うとともに、支部設置に関する規程が設けられた。規程の第2条(支部)で支部は「道内にあっては、各支庁管内毎、または2以上の支庁管内毎。道外にあっては、各都府県毎。」と定められた。このほか、公認指導員認定規程の一部も改正された。

平成5年度第1回理事会は、平成5年3月6日に幕別温泉ホテル緑館で開催され、支部設置に関する規程による初めての支部が報告された。札幌支部(支部長 平塚治郎。札幌支部はそれまで規約に規定のない本部特認支部として活動していた)、釧路支部(支部長 黒崎達郎)、富山支部(支部長 三上和夫)、オホーツク支部(支部長 足田桂)の4支部であった。またパークゴルフコースに明文化した基準がなく、公認コースの認定が急がれていたが、この日、パークゴルフ公認コースの基準が提案され決定された。

平成6年度第1回理事会は、平成6年3月19日に幕別温泉ホテル緑館で開催された。協会加盟団体の増加などに対応するため規約の一部が改正された。「事務局次長(1名)」を「事務局次長(2名)」に、また「指導普及副部長(1名)」を新たに設けた。また、公認コース基準による認定要綱や審査事項などを決定した。

平成7年度第1回理事会は、平成7年3月24日に幕別温泉ホテル緑館で開催。規約の一部改正が行われ、第4条の次に1条が加えられた。「第5条(友好団体) 本会は、常任理事会の議決を経てパークゴルフの振興に必要と認められる団体と協力関係を結ぶことができる。」。この改正により、財団法人日本レジャースポーツ振興協会を友好団体とすることになった。第7条(役員)の「指導普及副部長(1名)」を「指導普及副部長(若干名)」に改正し、同条中「常任理事、理事は任期中に団体の長が代わった場合、後任者が残り任期を代行する」を追加した。

平成8年度第1回理事会は、平成8年3月21日に幕別温泉ホテル緑館で開催され、国際パークゴルフ協会の法人化について、趣旨の説明があり了承された。

平成9年度第1回理事会は、平成9年3月22日に幕別温泉ホテル緑館で開催され、規約を大幅に改正した。まず、第7条（会員）を、(1)一般会員（住民組織（協会・同好会・自治体等））(2)民間会員（PG場を有する民間企業または個人）(3)企業会員（規約第2条に賛同した企業）と区分を明確にし、関連して第10条（会計）の会費（加盟団体負担金）を(1)一般会員10,000円(2)民間会員も同じ(3)企業会員30,000円に区分した。第8条（役員及び事務局）とし、従来事務局長・同次長指導普及部長・同副部長が役員であったものを、役員から外し事務局として位置づけた。支部設置に関する規程も改正され、複数の協会が存在する地域と明文化され、札幌市は1支部1協会から各区に協会を設置する支部としての位置づけとなった。また、各支部の主任指導員制度は、すでに3年前から事実上スタートしていたが、これを主任指導員に関する規程を定めて根拠と職務を明確にした。

常任理事会は平成4年度から

平成3年3月9日の理事会で規約の一部が改正され、役員会に代わって常任理事会ができたが、常任理事には芽室町、更別村、音更町、豊頃町、足寄町の各協会長が任命され、第1回常任理事会は平成4年7月6日に開催された。

初回の常任理事会では、規約に支部設置の規定が加えられて初めての支部設立を承認した。これは、(1)札幌支部(2)釧路支部(3)富山支部(4)オホーツク支部である。

平成5年度第1回常任理事会は、平成6年2月10日に開催され諸報告と議案について審議した。内容は報告事項が、(1)パークゴルフ発祥10周年事業（幕別町の事業）が前年実施されたこと(2)コース実態調査がまとまったこと(3)平成5年度新規加入協会など。審議事項は、(1)平成6年度新規加入申請の岩内協会など10団体の承認、網走から複数団体の申請があったが、一本化するように地元で努力してもらう。(2)公認コースの認定について「パークゴルフ公認コースの基準（平成5年3月6日決定）による公認コース認定要領案」を決定し、詳細について事務局でさらに検討を深め再度常任理事会に提案する。(3)事務局体制の強化と指導普

及副部長を設ける。(4)後任指導員の更新年次の延長については現行のままとする。(5)平成6年度大会日程、その中で国際大会の交流会を前日に行うことし、大会参加選手は交流会出席を義務づける。

平成6年度第1回常任理事会は平成6年6月20日に開催されたが、この中で二つの協会長通達が提案され各支部長宛に発送することになった。通達の第1号は「アドバイザー及び公認指導員について」で、公認指導員やアドバイザーのパークゴルフに対する理解認識や人格などの問題を提起されている事に関し、推薦に当たって十分検討をしてほしいこと。第2号は「国際協会加盟基準の1市町村1協会について」で、愛好者による協会組織は一つの町に協会は一つとなっていることを理解してほしい(過去には協会が複数の町も残っているが、これはさかのぼって事情が存在しているため止むを得ない特例である。)としている。また、公認コースの第1号にパークゴルフ発祥の「つつじコース」が、以下サーモン(幕別町)、ちろっとの森(同)、音別町パークゴルフ場の4コースが公認コースとなった。

第2回常任理事会は9月13日に開催され、公認コースの承認、新規加入団体の承認等を行った。

第3回常任理事会は平成7年2月15日に開催され、規約の一部改正を改正して指導普及副部長1名を若干名にすることを承認した。また、懸案であった「公認用具に関する規則」と「クマゲラマーク使用に関する規則」を決めた。

平成7年度第1回常任理事会は平成7年5月16日に開催され、新規加盟団体の申請等を審議した。

第2回常任理事会は7月7日に開催され、新規加盟団体の申請を承認した。

第3回常任理事会は、10月30日に開催され、新親加盟団体の申請承認と公認コースの承認をした。

第4回常任理事会は、平成8年2月9日に開催され、新規加盟団体の申請承認、支部設立申請の承認、国際パークゴルフ協会設立10周年(平成9年度)事業計画について協議した。また、協会の法人化についての経過が報告された。

平成8年度第1回常任理事会は平成8年4月24日に

開催され、新規加盟団体の申請承認と支部設立申請の承認をした。

第2回常任理事会は、7月5日に開催され、新規加盟団体の申請承認と協会法人化について文部省生涯スポーツ課との事前接触について経過報告された。

第3回常任理事会は11月8日に開催され、新規加盟団体の申請承認、公認コースの承認をした。

第4回常任理事会は平成9年2月7日に開催され、新規加盟団体の申請承認、支部設立申請の承認、規約の一部改正案として、会員を一般会員・民間会員・企業会員に区分し、会費のうち企業会員については年間30,000円とすることを承認。その他協会設立10周年事業計画について協議した。

平成9年度第1回常任理事会は3月22日に開催され、新規加盟団体の申請承認、支部設立申請の承認の他、「国際パークゴルフ協会主任指導員に関する規程」を決定した。

第2回常任理事会は5月16日に開催され、新規加盟団体の申請承認、公認指導員認定規程の一部を改正し、受験資格を23歳以上とした。また、事業実施年度を迎え「国際パークゴルフ協会設立10周年記念事業計画」を決定し、この中で「同実行委員会」を設置することとなった。

運営を支える支部組織

国際パークゴルフ協会が設立されてわずか2年弱の1992年（平成4年）春には、加盟団体の数も87と急速に増加した。特に道内は、ほぼ全域に協会ができ3月に開催された理事会では支部設置の条項が規約に盛り込まれ、道内は原則として支庁単位、道外は県単位で設置する方向となった。

もともと組織が広範囲に大きくなった場合には、協会運営をスムーズに行うための組織として、支部の設置は当然との考え方があったが、ようやくその時が訪れたといえる。

平成4年度の4支部（札幌、釧路、富山、オホーツ

ク)に始まり、平成5年度に2支部(後志、道央)、平成6年度2支部(日本海オロロン、空知)、平成7年度1支部(宮城県)、平成8年度7支部(根室、十勝、上川、胆振、宗谷、道南、石川県)、平成9年度3支部(日高、神奈川県、岩手県)、計19支部と着実に増加している。

支部には支部長ほか必要な運営役員が置かれているほか、平成6年度には支部に主任指導員を置き公認指導員認定会の主任講師や公認コースの調査業務を行うなど国際協会運営の重要な役割を果たしている。

公認指導員・アドバイザー

昭和63年度第1回理事会(6月14日開催)において、公認指導員認定規程が決定した。これにより7月12日に国際パークゴルフ協会初の公認指導員認定会が、幕別町民会館で開催された。

当日は道内12市町村から受講者があったが、開催要領により午前中は研修1として「パークゴルフ事始め」を事務局長の前原が受け持ち、パークゴルフの発祥からコミュニティスポーツとしての位置づけについて、「レクリエーション概論」を教育委員会社会教育主事の菅好弘が、「パークゴルフのルールとマナー」を協会事務局の三井巖がそれぞれ講義した。

午後は研修2として「実技」を普及指導部長の平塚治郎が担当し、つつじ・サーモン両コースで実技を指導した。初めての認定会で試行錯誤があったが、それぞれ手作りのテキ入トによる講義や指導を行い、待に「ルール・マナー」のテキストは、普及指導部長の平塚が苦心をして作ったもので、後の「パークゴルフ指導書」の原型となるものであった。

丸1日の講習を終え、指導員28人、アドバイザー31人が初めて誕生したのである。

公認指導員認定規程で、指導員の認定会は幕別町で行うと規定され、アドバイザーは加盟団体の主管で認定会を行うことができていたが、その後平成4年に規程の一部が改正され、指導員については各支部で認定会を行うことができるようになった。これを受けて平成6年度からいくつかの支部で認定会を行う

ようになり、平成9年度現在、公認指導員は1,670人に、アドバイザーは4,300人を数える。

ルール・規約・基準

国際パークゴルフ協会設立時（1987年）に規約が制定され、以後10年間時代の変遷にともない何度も改正を重ねて現在に至っている。また、規約を根拠として諸規則・規程・基準などを定め、組織づくりをしてきた。これらを列記すると次のとおりである。

国際パークゴルフ協会規約（昭和62年8月22日施行・最終改正平成9年3月22日）

国際パークゴルフ協会支部設置に関する規程（平成4年4月1日施行・最終改正平成9年4月1日）

パークゴルフ公認指導員認定規程（昭和63年6月14日適用・最終改正平成9年5月16日）

パークゴルフ公認指導員規程（昭和63年6月14日適用・最終改正平成9年4月1日）

パークゴルフ公認コースの基準（平成5年3月6日決定・最終改正平成9年4月1日）

国際パークゴルフ協会主任指導員規程（平成9年4月1日適用）

パークゴルフ用具認定に関する規程（平成7年4月1日施行）

クマゲラマーク使用料等に関する規程（平成7年4月1日施行）

パークゴルフ・プレー用具の基準（平成7年4月1日決定）

パークゴルフのルール・マナーについては、国際パークゴルフ協会が設立される以前から、幕別町パークゴルフ協会がルールづくりを進めてきた。国際協会が設立された当時は、前年（1986年）に幕別町協会の普及指導部長の平塚がまとめた用具の基準やルールを、国際パークゴルフ協会としての基準・ルールとして扱った。したがって前述した最初の公認指導員認定会のテキストもこれを使って行った。

平成3年に、それまでの基準やルールを整備して教本とした。これが現在まで二度改訂した「指導書」である。

法人化への道

国際パークゴルフ協会の法人化については、1992年（平成4年）ごろから事務局内部で検討を始めていた。当時パークゴルフは発祥して9年目を迎えていたが、急速に普及し北海道内は70%の市町村にコースが造られ、道外にも18コースが出来ていた。

この年の1月28日に文部省主催の「生涯スポーツコンベンション92」が開催され、全体会議のなかで幕別町が「パークゴルフの開発をとおしての町づくり」を発表したが、この会議には全国から行政・スポーツ団体・企業関係者など約1,000人が参加した。これが全国的なPRとなり、以来幕別町を訪ねる視察者は急増し、資料の発送や電話など、教育委員会の担当者は対応に追われていた。

北海道から普及したパークゴルフは、このようなPRの機会に恵まれたこともあって、全国的に知られるところとなり、普及が加速した。国際パークゴルフ協会としては、こうした状況を踏まえ、増え続ける愛好者や加盟団体に対して、より信頼される組織でなければならない。

1995年（平成7年）12月に法人格取得の前提として必要とされる「パークゴルフ任意団体届け出」を文部省に提出した。この届け出は、パークゴルフの発祥から現在に至る経過、国際パークゴルフ協会の活動状況など、文部省（所管は生涯スポーツ課）が事前にパークゴルフを理解する内容のものであった。

平成8年度第1回理事会（3月21日）に「議案第4号 法人化について」が提案され、国際パークゴルフ協会法人化の趣旨の中で次の4つの重点目標が説明された。

- 1 協会組織の充実と運営の安定化。（社員（現支部）の全国拠点整備）
- 2 事業の拡大と優良な財源の安定的確保
- 3 登録商標の適正な管理と運用
- 4 事務局体制の充実

任意団体の届け出以後、文部省所管の課と接触をした過程で幾つかの問題点が指摘されているが、これらをクリアするために引き続き努力を必要としている。

国際パークゴルフ協会設立10周年の節目にどんな事業を行ったらよいか、2年ほど前から事務局内部で話題になっていたが、なかなかこれという決まったものがなくいたずらに時間が経過していた。

パークゴルフの発祥10年では、国際協会編集の本「パークゴルフ」を北海道新聞社より出版したが、この本は国際協会として懸案のもので、以来同社のほか読売新聞北海道支社も毎年出版し愛好者に喜ばれている。

国際協会としては、これを一つのステップとしてパークゴルフをもっと幅広くとらえ、その効果を多くの愛好者に理解してもらえるような本の出版を、第2弾として考えていたが、それなら10周年の記念事業の一環として出すことにしては、ということになった。このほか「公認指導員名鑑」の作成も決まり、記念事業として一応の体裁が整った。1年前からこれらの作業に入り、思うように行かない事も多かったが何とか目鼻が着いた感じである。

ところで、この小史「IPGAストーリー」は当初予定になかったことで、今春になり急遽作るようになった。国際協会設立以前にさかのぼっての資料探しや時間に追われながらの編集で決して満足できる内容といえないが、国際協会がどのようにして生まれ育ったかを、出来るだけ具体的なエピソードをもとにしたながらの記述に力点を置いて作成した。

書き残したことも沢山あるが、特に裏方として地味な仕事をしてきた人たちのことを忘れてはならないと思う。例えば、国際大会のプログラム作りでは、長谷（振興会議メンバー）がワープロの技術を駆使して一つのスタイルを作り上げた。コースの管理は幕別町の仕事だが、特にメジャー大会が近づくと当日に向けて素晴らしいコースコンディションづくりに汗を流してくれた。国際大会の開会式も、こうした裏方の努力によりスムーズに、晴れやかに進行する。

選手が入場し、セレモニーの最初は「開会宣言」である。これは実行委員長の仕事だが、本人も周りも一番緊張する瞬間である。第3回大会から実行委員長は、小野寺（協会副会長）に代わったが、第4回の開会式に日本語で宣言したあと突然、予期しない英語が飛び出しどよめきが走った。終わると外国選手席からヤンヤの歓声が揚がって開会式の雰囲気をもたせた。

「Ladies and gentlemen now we hold. The 4th International championship of Park Golf Sponsored by Gavernor of Hokkaido and Bridgestone」

1993年（平成5年）4月、幕別町教育委員会に「パークゴルフ振興係」が出来たが、初代の係長に発令された浅田は、国際協会設立以前から振興会議のメンバーで一時期を除いてほとんどパークゴルフに関わっていた。それだけにパークゴルフに寄せる思いも深く、国際協会事務局の文字どおり専任者として細やかな気配りをしてきた。マスコミに対しても、以前の広報マン振りを発揮してパークゴルフに関する新聞記事は飛躍的に多くなった。このことも大きな功労である。

国際パークゴルフ協会は、10年の節目を越えて新しい歴史を作り始めるが、これまで歩んできた足跡の意義を理解し、将末に向かつてはパークゴルフ発祥の理念を継承しながら、協会員はもとより多くの愛好者の期待に応えていかなければならないと思う。国際パークゴルフ協会設立10周年を迎え、記念の事業を実施するに当たり関係各位には格別のご指導ご協力をいただき衷心より感謝の意を表したい。
